
キルクルス・ラクテウス

ビッキー・ホリディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キルクルス・ラクテウス

【Nコード】

N5948V

【作者名】

ビッキー・ホリデイ

【あらすじ】

修学旅行での夜、僕は星に迎えられ不思議な世界へ行った。そこは美しく、きらびやかな世界だった。とても現実とは思えない世界をさまよっていると、僕が片思いをしているマイちゃんが現われた。

この小説はブクログでも掲載しています。

僕は昼間のバスで食べたポテトチップスの残りをつまみながら、窓の外を眺めていた。目の前には海が広がっていて、それはすべてを飲み込んでしまえそうなほど暗く、夜空との区別がつけられないほどだった。窓を開けると潮風が僕の髪を優しく揺らした。湿気が少なく流れる汗もすぐに乾いてしまうような夏の夜に、それは適度な湿気を運んでくれた。僕は身を乗り出して景色をよく見た。その拍子にポテトチップスを落としてしまった。

空を見上げると驚くほどハッキリと星が見えた。キラキラと光る星は、まるで僕の好きなマイちゃんの流れす涙。僕は一度だけ見たことがある。のようだった。そうか、と僕は思った。海には星がない。だけど空にはある。これで区別がつけられるじゃないか、と。ふと振り返って部屋を見渡した。みんな寝てしまっている。あれだけ徹夜をしようと張り切っていたのに。お父さんから借りてきたデジタル腕時計を見ると、午前三時ちょうどだった。そろそろ僕も寝ないと明日が辛いな、とは思ったけど、どうも眠れる気がしないし寝たらしもつたいないような気がして、また僕は星空を見上げた。

東京では見られない空だ。マイちゃんも見ているのだろうか。いや、きつと寝てしまっているだろう。この空を、マイちゃんと一緒に見られたらどんなにいいだろう。こんな修学旅行なんて抜け出して、小学校最後の思い出を二人でつくりたい。

そう思った瞬間に、流れ星を見つけた。なにかお願いをしなくちゃ、と考えているうちにまた星が流れた。そうかと思えばまた。星が海に降り注いでいる。その様子は美しくもあり、同時に世界の終わりを見ているような恐ろしさを感じた。

流星群はやがて一筋の光となり、レーザービームのようにこちらへ向かってきた。そして僕のいまいる部屋まで届くとそこで動きが止まった。光の筋はいつの間にか帯となり両手を広げたくらいの幅

ができていて、銀河まで続く道のようにだと思った。僕は窓をまたいで光の道に片足をつけた。それは雲のようにぼんやりとしているけど、舗装された道路のようにしつかりと歩いて、どうやら歩けそうだった。僕は静かにその道に乗り、部屋の窓を閉めてから歩き出した。

光の道は下に見える海の向こうまでずっと延びていて、気が遠くなる思いだった。それでも僕は引き返す気持ちにはならず、ひたすら歩き続けていた。歩きながら空を見上げると、さっきよりもずっとよく星が見えた。無数にある星々のひとつが空からこぼれるように流れ、あつという間に僕のところまで来た。手のひらに乗るくらい、小さな星だった。僕がその星に触れると、星はいっそう輝きが増して、僕の自転車くらいの大きさまで膨れあがった。僕はまぶしくて目をつぶった。それでも光は僕のまぶたを抜けて、目の中に入ってくるようだった。光が静まり、僕が目を開けると、そこはなにものにも喻えようのない世界が広がっていた。

僕がいまいる場所はダイヤモンドの砂でできた道だった。すぐ右手にはエメラルドの川が流れていて、ルビーやサファイアなどといった宝石が底に、まるで砂利のようにあつた。水を手ですくうと、その水は緑色に輝いていた。空を見上げると完全な黒色をしていて、星は見えなかった。僕はダイヤモンドの砂を踏みしめて前へ歩き出した。歩きながらきよきよと周りを見ると、その景色の美しさに言葉も出なかった。川の向こうはダイヤモンドの砂漠が広がっていて、キラキラと輝いていた。僕がいま歩いている側は、横に二、三歩歩けば芝桜のような美しい花が無機質に輝き、遠くまで咲き乱れていて、そこを僕の半分くらいの背丈をした小人が五、六人で輪になって踊っていた。その上をクリスタルの馬が同じくクリスタルの荷車を引いて空を歩いていた。

視線を正面に戻すと、純白のドレスを着た女の子が僕に手を振っていた。誰だろうと目をこらすと、その女の子はマイちゃんだった。わかった。マイちゃんは僕に駆け寄ると、ぱっと花が咲くように笑い

かけて僕の手を握った。柔らかくて、ひんやりとしていた。僕は顔が紅潮するのを感じたけど、マイちゃんは特になにも意識していないようで、「行こう」とだけ言うところりと僕と同じ方向を向いて歩き出した。

マイちゃんの横顔は、ここにあるどんなものよりも綺麗だった。

純白のドレスがさらに魅力を引き立てる。じつと横顔を見ていると、マイちゃんは僕を見た。目が合うと彼女はうつすらと微笑んでまた正面を向いた。

「綺麗だなあ」

思わず僕は口に出してしまった。彼女が僕の顔を見た。僕はハッとして彼女から目を逸らした。

「綺麗だよ。わたし、このアレキサンドライトのお花畑が好きなんだ」

どうやら僕が芝桜だと思っていたのは、アレキサンドライトだったようだ。それにしても、と僕は思った。マイちゃんがこんなに笑っているところを見るのは初めてだった。僕が見ていたマイちゃんは、いつもなにかにイライラしているような気がして、先生の目が届かないところで僕を蹴ったり撲ったりしていた。僕はそんなマイちゃんしか見ていないから、あんなに優しい笑顔ができるとは思っていなかった。

こうして二人きりで手を繋いで歩くなんて、夢のようだった。いつも放課後は昇降口でマイちゃんを待って、一緒に帰ろうと思っていたけど、彼女は僕を見つける度に友達と一緒に僕を袋だたきにした。殴られて口の中を切っても、身体中あざだらけにされても、服をぼろぼろにされても、僕はマイちゃんが好きだった。一緒に帰りがかった。だけどそれはいつまで経っても叶わぬ夢でしかなかった。

僕はもう一度彼女の横顔を見た。僕の胸の鼓動が激しくなった。それと同時にふわふわと、空を泳ぐような気持ちになった。また目が合った。彼女は冬の夜のように澄んだ瞳をしていた。いつも僕を

見る目とは全然違った。でも僕は普段の猟奇的な、冷めた瞳も好きだった。睨まれたときのあの氷柱で心臓を貫かれるような、あの感覚が好きだった。

「着いたわよ」

僕はその言葉を聞いて、ハッと顔を上げた。マイちゃんは僕の手を引っ張って、アクアマリンでできた家の中へ、ドアを開けて入っていた。

「ここは？」

僕がそう尋ねても、マイちゃんは答えなかった。その代わりに「わたしの体育着を盗んだの、君でしょ？」

と訊いてきた。僕の心の中で、いままで積み上げてきたものすべてが音を立てて崩れていった。さあっと血の気が引くのがわかった。どうして、どうしてわかったんだ。

マイちゃんはそれでも無垢な笑顔を崩さなかった。そうだ、確かに僕はマイちゃんの体育着を盗んだ。放課後の教室、みんな下校したあとに僕はマイちゃんのロッカーに入っていた体育着を手に取り、それに顔をうずめた。太陽や砂埃の臭いと一緒に、酸っぱいような臭いがした。これがマイちゃんの汗の臭いか、と思うと不思議と下半身の一部がうずいた。そして僕はそれをランドセルに詰めて学校を出た。

それからすぐに僕は教室に忘れ物をしたことに気づいて、帰り道から学校へ戻った。教室に入ろうとしたときに、マイちゃんが自分のロッカーの中を見て立ちすくんでいるのを見た。僕は動けなかった。じっと見ていると、なにかが夕陽の光を受けてキラリと光った。それがマイちゃんの涙だと気づくのには時間は要らなかった。

綺麗だった。しばらくそのまま見ていると、マイちゃんが僕に気がついた。目に涙を溜めたまま、マイちゃんは無言で僕に歩み寄り、みぞおちを蹴ってきた。僕がうずくまると、今度は僕のこめかみを殴った。思わず床に倒れ込む。それでも構わず、めちゃくちやに蹴ってきた。その間、マイちゃんはなにも言わなかった。僕は蹴りが

入ることに背筋に電気が走り、全身が震えるような感覚がした。それは覚えたばかりのマスターベーションよりも気持ちよかった。

マイちゃんはぜえぜえと肩で息をしていた。僕はペニスが脈打っているのを感じていた。失禁していたのだ。マイちゃんは僕のことなど最初から気づいていなかったように、見向きもせず去ってしまった。

僕がそのときのことを思い出している間も、マイちゃんは笑顔を崩すことはなかった。僕は素直に「うん」とうなずいた。

「やっぱりね」

そう言うときマイちゃんは僕に歩み寄り、そつと僕の頬にキスをした。それからマイちゃんは僕に背を向けて家から出ていってしまった。あまりに突然のことで、僕はぼつと立っているしかなかった。あのマイちゃんが、僕にキスをした。頭の中はそのことであらうだった。アノマイチャンガ、ボクニキスヲシタ。

僕はマイちゃんを追おうと、ドアを開けた。しかしそこで見たのはどこまでも続いているラベンダー畑だった。空は雲一つない快晴で、太陽の光が降り注いでいる。暖かくて気持ちのいい風が吹き抜けて、それに乗ってきたラベンダーの香りが鼻をくすぐった。

僕はアクアマリンの家から出てそのまま少し歩いた。永遠にさえ思えるほどに広がっているラベンダーが、風がそよぐたびにさざ波のように揺れる。ふと振り返ると後ろにもずつと続いていた。アクアマリンの家はどこにもなかった。

僕は仰向けに倒れた。ラベンダーの茎がぼきりと折れる音がした。目の前に映るのは晴れわたった空だけだった。ほかにはなにもない。何気なく空に向かって手を伸ばすと、ふわりと身体が浮かぶような感覚がした。僕が立ち上がると、身体が地面から浮いていることに気がついた。それから階段を登るように一步一步空に向かって歩いた。僕はただひたすら登っていった。

下を見ると僕がいた場所は、四方をコバルトブルーの海で囲まれたラベンダー畑だとわかった。ラベンダー以外のものは見当たらない。

かった。海にぽつんと浮かぶその紫の孤島は、細くて美しい指につけられた、例えばマイちゃんの指につけられたアメジストの指輪のようだった。

空を見上げると青空ではなく、ダイヤモンドの砂漠とエメラルドの川が見えた。どれくらいの間登ったのかはわからないけど、手を伸ばせばダイヤモンドの砂漠に届きそうだった。僕は背伸びをして砂漠に手をかけた。プールから上がるような気持ちで砂漠に立った。見上げた空は黒かった。

川を隔てて向こう側はアレキサンドライトの花畑が広がっていて、遠くのほうでは小人が踊っていた。マイちゃんはどこへ行ってしまったのだろう。辺りを見回しても、それらしき人は見つからなかった。砂漠の向こうから、輝くながかごこちらへ向かってきた。僕はそれを迎えに近づいていった。クリスタルの馬車だった。

「すみません」

僕はマイちゃんの行方を尋ねようと、馬車を止めた。荷車の中は銀色のヴェールで遮られていた。中から白くて綺麗な指が現われ、ヴェールをよけた。

「マイちゃん」

マイちゃんはさつきと同じように優しく僕に微笑みかけた。僕はマイちゃんに手を引かれて馬車に乗った。中は二人乗ったらいっぱいだった。馬車はすぐに動き出した。ダイヤモンドの砂をザックザックと踏みしめて進んでいく。僕はヴェールを手でよけて、外の景色を見ていた。後ろではエメラルドの川が遠くでキラキラと光っている。前を見るとトパーズやガーネットなどの花畑が広がっていた。マカライトの泉が、僕らを歓迎してくれているかのように輝く水を噴出させていた。

馬車はその花畑まで来ると、僕がラベンダー畑で空を歩いたのと同じように、空に向かって進んでいった。エメラルドの川、ダイヤモンドの砂漠、踊っている小人たち、トパーズやガーネットなどの花畑、マカライトの泉、そういったものがだんだんと遠く離れてい

って、ついに深い闇に溶けて見えなくなってしまった。クリスタルの馬車は闇の中をひたすら進んでいる。スポットライトで照らされているように、馬車だけが輝いていた。僕は少し不安になって、隣にいるマイちゃんを見た。穏やかな表情でじっと前を向いて、目を閉じていた。まるで幸福な夢を見ているかのような様子だった。

「もう少しよ」

「ねえ、これあげる」

胸のところにはマイちゃんの名字が書かれていた。どうしてマイちゃんがこの本を持っているんだ、これは僕の部屋にある勉強机の、鍵付きの引きだしにしまっているはずなのに。その鍵は僕がいつも持っているはずなのに。

マイちゃんのない馬車は、ずいぶんと寂しく感じた。心の中もがらんどろになってしまったようだった。僕に残されたのはこの体育着だけ。僕はそつと体育着に顔をうずめた。

練習をしたり、跳び箱を跳んだり、リレーをしたり、ドッジボールをしたり、縄跳びをしたり、マラソンをしたりしていたんだ。そう考えると心臓が胸を突き破って飛び出しそうなほどドキドキした。

息ができなくなり、僕は体育着から顔を離した。目の前には僕ら

が修学旅行で泊まっているホテルがあった。波打つ音が後ろから聞こえる。空は暗く、星がよく見えた。腕時計を見ると、午前三時ちようどだった。

はあ、とため息をつくとき、空からなにかが落ちてきた。見ると、それは食べかけのポテトチップスの袋だった。

僕は眠くてたまらなかった。三時まで起きていれば当然だろう。朝になったらみんなにいままで寝ずに起きていたことを自慢しなくては。マイちゃんもきつと僕のことを見直してくれることだろう。そう考えると朝が楽しみになってきた。僕はマイちゃんの体育着を手にとって、ホテルのロビーへ入っていった。

(後書き)

キルクルス・ラクテウスとは、ラテン語で「天の川」の意です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5948v/>

キルクルス・ラクテウス

2011年8月8日03時29分発行